

文庫彩時記 「三集・本棚の漫歩計」「目次」

はしがきに代えて

第一章 父を編あんだ日

父を編あんだ日

エドワード・ムーニー・ジュニア 『石を積むひと』 3

遠ざかるターニング・ポイント

増田俊也

『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか(上・下)』 9

蚊が騒動

村上元三 『加賀騒動』 14

二割増しと八掛け

山内昌之 『嫉妬の世界史』 20

炎暑に浮かんだ影絵  
廻り舞台の陰と陽  
驟雨のあとさき

小林英樹『完全版ゴッホの遺言』 25  
菊池寛短編『藤十郎の恋』 30  
永井荷風『溷東綺譚』 35

## 第二章 青嵐、峰々を渡る

白い秋、禁忌の歌  
丁か半かの年忘れ  
初詣はどちらへ  
花も嵐も  
埋もれかけた家族の履歴書  
春なれど 渡る世間は  
青嵐、峰々を渡る

伊集院静『白秋』 43  
阿佐田哲也『次郎長放浪記』 49  
志川節子『春はそこまでく風待ち小路の人々』 55  
朝井まかて『恋歌』 60  
マリーナ・レヴィツカ『おっぱいとトラクター』 66  
黒川博行『離れ折紙』 72  
乙川優三郎『脊梁山脈』 78

## 第三章 母たちの春夏秋冬

私だけ、颯爽と  
恥ずかしながら  
闇商人と山賊  
母たちの春夏秋冬  
遠く微かな弔鐘  
痩せ我慢の美学

雪降り積む古都・小景

桂 望実『嫌な女』 85  
安岡章太郎『質屋の女房』 91  
グレアム・グリーン『第三の男』 97  
船曳由美『二〇〇年前の女の子』 103  
宇江佐真理『夕映え』 108  
古今亭志ん生『井戸の茶碗』  
〔志ん生人情ばなし・志ん生の嘶3〕より 113  
五木寛之『金沢望郷歌』 118

第四章 信じるも信じないも

- 巧たくみの技わざが息づく里 木内 昇『櫛挽道守』 125  
地味な男の物語 篠田節子『銀婚式』 131  
華はなニ憂愁無キニシモ非ズ 沖方 丁『はなとゆめ』 137  
信じるも信じないも ベリンダ・バウアー『見える女』 143  
やっかいなものくつつけて 窪美澄連作長編『ふがいない僕は空を見た』 149  
八月が来ると、つい ネヴィル・シュート『パイド・パイパー〜自由への越境』 155  
幸薄さやうすき子らの秋 ロバート・B・パーカー『初秋』 161

第五章 堅忍不拔けんじんふぼつの女たち

- 吉原ぶらりぶらり 松井今朝子『吉原手引草』 169

幻想あるいは錯覚の譜

ポール・オースター『幻影の書』 175

浮きつ沈みつ

安部龍太郎『等伯』 180

母の〴〵秘密

水上 勉『越前竹人形』 186

堅忍不拔の女たち

ボストン・テラン『音もなく少女は』 192

間一髪、のお話し

梶山季之連作短編集『せどり男爵数奇譚』 197

陽炎かげろうの中に揺れる影の如く

ウイリアム・アイリツシュ『幻の女』 203

第六章 神おぼの思めし召めしに委ゆたねよ

- 美麗之島グラフィティ 東山彰良『流』 211  
緊迫の公判廷前夜 フェルディナント・フォン・シーラッハ『コリーニ事件』 217  
霊験れいげんあらたかの巻 古今亭志ん生『佃祭』（志ん生人情ばなしより） 223  
備前岡山の空にかける 飯嶋和一『始祖鳥記』 229



銜てらいも外連けれんもなく  
罪つみびとたちの命運いは如何かに

吉村 昭 『夜明けの雷鳴／医師高松凌雲』 321

豊饒とよたかとして凜れんとして

井上ひさし 短編集 『秘本大岡政談』 326

安嶋 彌 『千代女と芭蕉』

(『09年版ベスト・エッセイ集／死ぬのによい日だ』より) 331

エピローグ

## 第一章 父を編あんだ日